

仏教伝来

玉尾 洋一

6世紀、日本（正確には日本という国名はまだなく、「倭国」と呼んでいました。）に仏教が伝来し、日本人の文化や精神世界に深く入り込んだのは聖徳太子の力によるところが大きいのです。しかし、最初に仏教に興味を示し、これを受け入れたのは蘇我氏でした。なぜ日本に仏教が伝わったかを考えると、百済の聖明王の政策として、機を見て使者を遣わしたとも、もとより早くから国外に目を向け、深いつながりのあった百済系氏族から中国や朝鮮半島情勢を入手していた蘇我氏が要請したから送られてきたとも考えられます。また、いつ仏教が伝わったかの議論については、当時は百済から多くの渡来人が日本に来ており、仏像や経文など仏教に関わるものを私的に持ち込んだと考えるのが自然でしょう。ですから、いつ伝来したのか特定できないというのが正しいのかもしれませんが、そこで、「**仏教伝来**」＝「**仏教公伝**」という言葉を使い、仏像や教論などが朝廷に献上された時が日本に正式に仏教が伝来した年と解釈したいと思います。

【別解釈】朝鮮半島の最南に加耶国があり、ここは倭の領土であった。それを百済は当時倭の大連であった大伴金村に賄賂を渡し、加耶国を百済の領地にした。それを知った欽明天皇は激怒した。百済は驚きなんとか天皇の怒りを収めるため、仏教を伝来した。この事件により大伴は失脚し、蘇我が代わりに台頭した。



百済の聖明王の使者は難波津に着き、大和川を船で上り、初瀬川河畔の海柘榴市に上陸しました。

この辺りに大きな市が開かれていました。近くには欽明天皇の磯城嶋金刺宮さしのみやがあったとされ、「**仏教伝来の地**」の碑が立つ。

☆仏教伝来年は大きく2説あります。

- 『日本書紀』（720年成立）によると552年です。

「欽明天皇13年（欽明天皇の即位は539年としているので、西暦552年です。）百済の聖明王が朝廷に遣いを送ってきました。その一人が怒利斯到契（「り」の字は正しくは口偏に利を書く）で、釈迦仏（金銅製）一体、幡蓋（「幡」「蓋」とも仏前に置かれた）、経論数巻を献上しました」とある。



この中で、「上表文（天皇への挨拶文）」や「詔」も載っているが、使われていた文章が「金光明最勝王經」にあるのと似ている。この「金光明最勝王經」は703年に唐の義浄が漢訳したものであり、「上表文」にある

わけがない。

こんこうみょうさいししょうおうきょう

金光明最勝王経・・・『金光明経』は、4世紀頃に成立したとみられる仏教仏典のひとつ。『法華経』・『仁王経』とともに護国三部経のひとつに数えられる。聖武天皇は詔により、各国に国分寺・国分尼寺を建立すること、さらに国分寺の塔には、金字の『金光明最勝王経』を安置することを命じた。国分寺の正式名称は「金光明四天王護国之寺」

じょうくうしやうとくほうおうていせつ

・『上宮聖徳法王帝説』（国宝：在知恩院）8世紀初めに成立したとされ、日本書紀と並ぶ書物で、主として聖徳太子の伝記が書かれています。これによれば、仏教が日本に伝来したのは、「志帰嶋（天皇：欽明天皇）の時代、つちのえうま戊午の年10月12日、百済国の主明王（聖明王）が初めて渡ってきて、仏像・経教、僧等を奉る。」とあります。欽明天皇が即位した年を531年としているので、仏教伝来は538年となります。

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 聖徳太子のきょうだいたち | 11. 薬師像光後銘 |
| 2. 聖徳太子の子どもたち | 12. 釈迦三尊像光後銘 |
| 3. 聖徳太子の孫と異父妹兼姪 | 13. 釈迦三尊像光後銘の釈 |
| 4. 聖徳太子の祖父・父・伯叔の天皇たち | 14. 天寿国繡帳銘 |
| 5. 冠位十二階 | 15. 天寿国繡帳銘の釈 |
| 6. 厩戸豊聡八耳命 | 16. 巨勢三杖の歌 |
| 7. 慧慈法師 | <u>17. 建立仏法</u> |
| 8. 太子創建の七寺 | 18. 上宮王家滅ぶ |
| 9. 勝鬘経を講ず | 19. 歴代天皇と陵墓 |
| 10. 聖徳太子薨逝 | 20. 裏書 |

17. 建立仏法

ていび

丁未年（587年）の六月・七月に、蘇我馬子宿禰大臣は、物部守屋大連を伐った。このとき、大臣の兵士たちは打ち勝つことができずに退いた。そこで、上宮王は四天王像をかかげて兵士たちの前に立て、誓って仰せられた。「もしこの大連を滅ぼすことができたなら、四天王のために寺を造り、尊んで重く供養いたしましょう」そうして、兵士たちは勝つことができて、大連を殺すことができた。こうして、難波に四天王寺が造られた。聖王がお生まれになって、十四年のことである。

志癸島（欽明）天皇の御世、戊午年（538年）十月十二日に、百済国主の聖明王がはじめて仏像・経教・僧らを伝え奉った。みことのりして、蘇我稻目宿禰大臣に授け、興隆させた。物部氏が疫病の原因は崇仏のせいだと言って、かのえとら庚寅年（570年）、仏殿を焼き滅ぼし、仏像を難波の堀江に流し捨てた。

きのとうし

推古天皇の御世の乙丑年（605年）五月、聖徳王は島大臣（蘇我馬子）とともに計画して仏法を立て、さらに三宝（仏・法・僧）を盛んにされた。そうして五行（陰陽五行思想）になぞらえて爵位を

定められた。七月に、十七余の法(十七条憲法)を定められた。

・『元興寺縁起』といわれる『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』(747年成立)にも仏教伝来は538年とされています。『元興寺縁起』は元興寺(飛鳥寺)創建の由来が書かれた書物です。『上宮聖徳法王帝説』同様、『日本書紀』が書かれる以前の資料に基づいて作成されたものと言われます。

伽藍縁起・・・仏教公伝から元興寺の創立・歴史【向原寺(豊浦寺)の比重が大きい
流記資材帳・・・元興寺の所有する財産や荘園など

「縁起」…聖徳太子〔622年没〕が推古天皇に勅を受けて記したと書かれている。

豊浦宮で天下を治め賜う推古天皇から 癸酉〔613〕正月九日、馬屋戸聡耳皇子は、勅を承って元興寺(がんごうじ)などの本の縁(ゆかり)、及び等与弥気命の発願、そして諸臣らの発願を記します。

大倭国の仏法は、斯曇嶋宮で天下を治め賜った欽明天皇の御世に創始されました。蘇我の大臣稲目宿祢がお仕えしたとき、天下を治めて七年、歳次戊午〔538〕十二月に渡来し、百済国の聖明王の時、太子像と灌仏器一揃え、そして説仏起書の巻一箱がもたらされました。

現在は、仏教公伝を538年とするのが通説です。

そして申し上げました。「まさに仏法は既に世間の無上の法と聞かれ、あなたの国もまた修行すべきです。」時に天皇はこれを受けられ、諸臣に「此の他国より送られて渡ってきたものを、用いるべきか否か、よく相談して申すべし。」と告げられました。

欽明天皇は仏教を礼拝すべきかを臣下たちに問うと、「大陸の優れた文化であり、西方の国々が礼拝している仏教を受け入れるべきである。」と蘇我大臣稲目が答えたのに対して、物部大連尾輿(なかとみむらじかまこ)中臣連鎌子(天智天皇時代の中臣鎌子・鎌足とは別人でつながりのない人物)らは「外国の神を受け入れれば、日本古来の「神(国つ神)」が怒る。」という理由から、仏教に反対し、徹底的に排除すべきと主張しました。

この時天皇は大臣に同意して「何処に置いて拝礼すべきか」とお尋ねになり、大臣は「大々王(推古天皇)の後宮を分けて、その家を拠点にするとお決めなさいませ」と申し上げました。そこで天皇は、大々王をお呼びになり「お前の牟久原(向原)の後宮に祀る寺を作り、他国の神の宮にしたいと思う。」と告げられ、大々王は「大仏の御心に順うことにして、さがります。」と申し上げ、この時この宮殿に居を定めて拝礼を始められました。この時より向原の家は日本最初の寺となりました。現在、向原の家は飛鳥の向原寺です。

その後、国内で疫病が流行った時、尾輿はその原因が仏教を受け入れたせいだと批判しました。そのため、570年に蘇我大臣稲目が死去すると、天皇の許可を得て向原の寺を焼き払ってしまいました。家は焼けても仏像は燃えなかったため、仕方なくこれを難波の堀江に投げ込んだのです。

しかし、疫病はなくなり、天災も続きました。

後に推古天皇はここ向原の地を宮(豊浦宮)としました。10年後、小墾田の宮に移った後は豊浦寺(向原寺)となりました。

物部尾輿が仏像を投げ捨てた池と伝わるのが難波池。当時ここは{難波の堀江}とよばれていました。

投げ捨てられて池に沈んでいた仏像は信濃の国から都に来て、この池の前をたまたま通りかかった信州麻績里(現在の長野県飯田市座光寺)の住人で本多善光(本田善光)という人物によって発見されました。長野の善光寺縁起によると、仏像は聖徳太子の祈りに一度だけ水面に現れたが再び底に沈んだままとなっていました。しかし、本多善光が池の前に来ると、金色の姿を現し、善光こそ百済の聖明王の生まれ変わりであると告げます。善光はこの仏像(一光三尊:3体の仏像に一つの光背を負う:御本尊:阿弥陀如来像)を背負って信濃にもどり、自宅の西の間の臼(座光の臼)の上に置きました。ここが現在「元善光寺」があるところで、その後、642年、皇極天皇の時代に、如来のお告げにより、本多善光が長野の善光寺に本尊を遷座しました。これは善光寺の創建に関わる話です。

584年9月、百済から鹿深臣が弥勒菩薩石像一体と佐伯連が仏像一体を持ってもどってきました。蘇我馬子は仏殿を建ててそれを収めた。蘇我馬子は全国に修行者を探させたところ、播磨にいた恵便という高麗からの渡来人がいることがわかりました。そこで恵便を仏教の師とし、さらに3人の娘を出家させて尼(あま)としました(豊浦寺)。また、自分の家の東に仏殿を建立し、弥勒菩薩の石造を安置しました。また、馬子は石川の自宅-石川精舎にも仏殿を建てて仏像を収めました。585年2月には、大野の丘に塔を建てました。

恵便・・・高句麗(こうくり)(朝鮮)の僧。還俗して播磨(兵庫県)にいたが、蘇我馬子にまねかれ、敏達天皇13年(584)百済(朝鮮)からきた仏像をまつる導師となる。さらに司馬達等の娘ら3人を日本ではじめての尼僧、善信尼、恵善尼、禅蔵尼として出家させた。

司馬達等・・・継体天皇一六年(522)に来日して帰化し、大和(奈良県)高市郡坂田原に草庵を営み、仏像を安置したと伝えられる。孫に鞍作止利(仏師:飛鳥大仏・法隆寺金堂釈迦三尊像)がある。

しかし国内には疫病がはやり、古来よりの神々をないがしろにした祟りだと騒がれ始めたため、崇仏を承認していた敏達天皇も物部守屋や中臣勝海の主張を聞き入れて排仏命令を出します。この時を待っていた物部守屋は、仏殿や塔に火を放ち焼き払ってしまいましたが(その時、善信尼たちの三衣(袈裟)を奪い、禁固して、海石榴市で鞭打った)、その後も疫病はおさまらないばかりか、天皇や馬子、守屋までが病気になってしまいます。馬子は崇仏の天皇から再び崇仏の許可をもらおうとたちどころに病が治りましたが、天皇は崩御してしまいました。続く用明天皇は587年、在位わずか2年で崩御しました。この後の天皇を誰にするかで物部氏と蘇我氏の対立が激化します。

☆蘇我馬子の推薦・・・妹と欽明天皇との子の泊瀬部皇子

☆物部守屋の推薦・・・敏達天皇の弟の穴穂部皇子

しかし、馬子は穴穂部皇子や宅部皇子(宣化天皇の皇子)を殺害してしまいます。これは馬子が自

ら討たれる前に先手を打ったとみてよいようです。こうして、蘇我氏が推す泊瀬部皇子が崇峻天皇として即位しました。

この後、蘇我氏と物部氏は武力衝突を起こし、^{ていへ}丁未の変(587年)へと発展します。権力闘争に勝利した蘇我馬子や聖徳太子は、「仏法興隆」をめざし、その後本格的な寺院建設を行っていきます。

^{ほうこうじ}法興寺（「興」は法をおこすの意味をもつ）は明日香村にあり、現在は飛鳥寺（「安居院」）として知られています。法興寺は我が国最初の本格的な伽藍配置の寺院として蘇我氏によって建立されました。また、飛鳥寺は日本で最初の瓦葺き寺院でもありました。掘っ立て柱の板葺き建物しか見ていない人々にとっては外国の文化を直接感じるものであったようです。瓦の使用の他にも寺院建築には多くの渡来人の技術が使われています。掘っ立て柱式の建築から石の上に柱を立てる礎石を用いた技法もその一つで、それまでの建築方法が一変しました。聖徳太子は大阪に四天王寺、奈良斑鳩に法隆寺（「隆」は法を隆める：たかめるという意味をもつ）を建立しました。

丁未の変後、

594年推古天皇が「三宝興隆」の詔が発せられた。三宝とは仏・法・僧を意味し、仏教そのものを表します。仏・・・釈迦 法・・・釈迦の説いだ教義 僧・・・釈迦の教えを説き、それを実践する人 推古天皇によって三宝興隆の詔が発せられたのは、仏教への造詣が深い厩戸皇子(聖徳太子)の影響によるものです。厩戸皇子は仏教(三宝)が盛んになり栄えることが、国を統一する最も良い方法と考えました。この詔により豪族たちは競って仏像を祀る建物を建立しました。この建物を“寺”と呼ぶようになりました。

607年聖徳太子は推古天皇の御名で「敬神の詔」を^{しやう}詔されました。

「古来わが皇祖の天皇たちが世を治めたもうのに、つつしんで^{じんぎ}熱く神祇を敬われ山川の神々を祀り、神々の心を天地に通わせられた。これにより陰陽相和（和をもって貴しとなす）し、神々のみわざ（神のなせる業）も順調に行われた。今わが世においても、神祇の祭祀を怠ることがあってはならぬ。群臣は心をつくしてよく神祇を拝するように」

こうして我が国は神道と仏教を見事に大調和させていきました（神仏習合）。



飛鳥地図



【向原寺（豊浦寺跡）】

甘樫丘の北西麓の豊浦にある。このあたりは推古天皇の豊浦宮や小墾田宮のあった所とも伝えられている。

その後、581年に再建され桜井寺となり百濟から帰朝した善信尼が住み尼寺となった。その頃は、別名、建興寺ともいわれた。

豊浦宮で即位した推古天皇は603年豊浦宮地と桜井寺地とを交換され、旧宮跡に桜井寺を移し豊浦寺といい、寺地に移った宮を小墾田宮と称したといわれる。豊浦寺は由緒から

いけば日本最初の寺であり、舒明朝には塔婆が建立され、持統天皇のときには、飛鳥五大寺の一つであった。その後、衰退するも、現在江戸時代に建立された向原寺（浄土真宗本願寺派）があり、その後を引き継いでいるといわれる。



【難波の堀江】

仁徳天皇の御代に開削された、大阪の人工の放水路の事。高津宮(現在の大阪城周辺か)の北の原っぱを掘って、上町台地東岸に沿って、南から流れ込んでくる大和川水系の川の水を、西の大阪湾方向へ流した。その放水路を堀江と言った。

【^{ていへ}丁未の乱】敏達天皇の没後、欽明天皇の第4皇子「用明天皇」(ようめいてんのう)が即位します。用明天皇は、蘇我稲目の孫だったことから仏教を容認しますが、587年、在位2年で崩御。用明天皇が亡くなったことで、排仏派だった物部守屋と崇仏派の蘇我馬子との対立が表面

化し、丁未の乱がついに起こります。

蘇我馬子は、「厩戸皇子」や泊瀬部皇子などの皇族や諸豪族の軍兵を率いて、物部守屋の館がある河内国渋川郡へ進軍し、^{えかがわ}餌香川(現在の大阪府藤井寺市にある石川)の河原(近鉄南大阪線駒ヶ谷駅下車)で、物部守屋と対峙します。

代々軍事や警備を担当し、軍事には強かった物部軍は、木の上から矢を注ぎ、蘇我軍を攻撃。蘇我軍は一時撤退を余儀なくされます。

その後、一進一退の攻防が続きますが、蘇我軍が木に登っている物部守屋を射落としたことによって物部軍は総崩れとなり、物部氏は滅亡。これにより、蘇我氏はさらに権勢を強め、仏教の信仰も本格化していくこととなりました。

